

総合討議の総括

統一テーマ「ロマンス諸語における色彩表現」

司会：古浦敏生(Toshio KOURA)

パネリスト：小林標(Kozue KOBAYASHI)・倍賞和子(Kazuko BAISHO)・古浦敏生(Toshio KOURA)・山本真司(Shinji YAMAMOTO)・鳥居正文(Masafumi TORII)・寺崎英樹(Hideki TERASAKI)・布施温(Yutaka FUSE)・黒澤直俊(Naotoshi KUROSAWA)

§1 はじめに

日本ロマンス語学会第45回大会の統一テーマは「ロマンス諸語における色彩表現」であった。この枠内で寺崎・布施・山本の3名が報告(持時間、各20分)を行なった。休憩を挟んで、総合討議が行なわれた。司会は古浦が担当し、小林・倍賞・古浦・鳥居・黒澤はそれぞれの専門とする言語の色彩表現に関する報告(持時間、各10分)を行なった。寺崎・布施は既に報告を終えてはいたが、若干の補足説明をした。山本は枠内の報告のほかにも専門とする言語に関する新たな報告も行なった。以下、それぞれのパネリストが総合討議の場での発言順にその報告内容を簡潔にまとめて記すこととする。

§2 パネリストの報告内容

I. ラテン語に関する小林標の報告内容

ラテン語からロマンス諸語への発展においては、緑と黒は比較的統一的で、赤、白、青、黄は多様に変化している。特に黄は、ラテン語でもロマンス諸語でも名称に関する限り特定しにくい色彩である。形容詞の語彙で最も変化がなかったのは「緑の」で、ラテン語では *viridis* 一語で統一され、ロマンス諸語においてもその子孫がそのまま使われる、稀な例である。「黒い」は、ラテン語では当初輝きの有無で *niger*、*ater* の二語が使い分けられたが、徐々に *niger* に比重が移り、ロマンス諸語では *niger* の子孫のみが生き延びた。「白い」にも黒と同様の使い分けで *candidus*、*albus* の二語があったが、ロマンス諸語では前者は消え、後者はルーマニア語のみに残り、他の言語ではゲルマン語起源の語で置きかえられた。「青い」のラテン語は *caeruleus* 一語であるが子孫を残してはいない。ルーマニア語ではラテン語系の語が使われるが、他ではゲルマン語系統の語かペルシア語がアラブ語経由で入ったものに置きかえられている。「黄の」は、自然界におけるその色の安定性の欠如のせいで、ラテン語においてはその名称を特定できない。最も代表的な *flavus* は消え、ロマンス諸語は別々に独自の色彩名を作る。「赤い」はラテン語ではいくつかの語形がある(*ruber*、*rufus*、*russus*) のだが、その印欧語的語源は一つで他の多くの印欧語にも子孫がある、色彩語とし

ては稀な例である。このうち、稀語であった *russus* とその派生語 *russeus* がイタリア語、スペイン語にそのまま「赤い」として残り、その他の言語に残った場合は意味が変化してフランス語、オック語では「赤毛の」、カタロニア語では「金髪の」、ポルトガル語では「紫の」になる。フランス語、オック語の「赤い」の語源となった *rubeus* は *ruber* 他と同起源であるが、ラテン語資料を見る限りでは赤そのものではない。それはカタロニア語、ポルトガル語では「赤毛の」の意味となり、スペイン語では「金髪の」の意味となって使われる。

II. ルーマニア語に関する倍賞和子の報告内容

日本語の色を表す形容詞で古いものは、「白い」「黒い」「赤い」「青い」の僅かしかなく、いずれも「-い」で終わり、形容詞特有の活用形を持つ。ルーマニア語で古くからある単語と言えば、ラテン語起源のものだが、色を表す形容詞でラテン語起源のものは比較的少ない。そして、これらは形容詞の語尾変化、つまり性、数、格に応じ語尾を変える。(例: *alb* 「白い」 < *lat. albus*, *negru* 「黒い」 < *lat. niger*, *roșu* 「赤い」 < *lat. roseus*, *albastru* 「青い」 < *lat. albastru*, *galben* 「黄色」 < *lat. galbinus*, *verde* 「緑」 < *lat. viridis*, *vânăt* 「紺、濃い紫」 < *lat. venetus* 等、語尾変化省略。) 桃色、茶色、灰色、水色、黄金色のように、日本語では名詞に「色」をつけてその物の色を表す方法があるが、ルーマニア語では「何々の色をした」とでも言うべき接尾辞 *-iu* をつけると形容詞としての機能を持つ。(例: *auriu*=*aur* 「金」+*iu*, *argintiu*=*argint* 「銀」+*iu* *portocaliu*=*portocală* 「オレンジ」+*iu* 等。この *-iu* は語尾変化を行う。)

ルーマニア語の色の形容詞として、最も数が多いのは、フランス語よりの借用語である。これらは語尾変化をしない。(例: *gri* 「灰色、グレイ」 < *gris*, *kaki* 「カーキ色」 < *kaki*, *roz* 「ピンク」 < *rose*, *maro* 「褐色」 < *marron*, *oranj* 「オレンジ色」 < *orange*, *indigo* 「藍色」 < *indigo*, *bleu* 「ブルー」 < *bleu*, *crem* 「クリーム色」 < *creme*, *oliv* 「オリーブ色」 < *olive*, *lila* 「ライラック色」 < *lilas*。) 同じくフランス語起源と言われている *violet* 「紫、すみれ色」 < *violet* は語尾が変わる。ルーマニア語に根付いた程度が高いからだろう。

色の表現はファッション性が強いので、ルーマニア語でも日本語でも色を表す形容詞は借用語が多い。日本語の「桃色」は若い人の語彙にないのではなかろうか。「ピンク」が普通に使われている。「ブルー」さえ、違和感なしに使われるようになった。ルーマニア語でも *oranj*, *oliv* の方が *portocaliu*, *măsliniu* より格好良く響くのだろう。

III. イタリア語に関する古浦敏生の報告内容

イタリア語における色彩表現の特色として、①色彩形容詞が名詞によって修飾され得ること。たとえば、*nero carbone* 「石炭の黒色の」、*rosso fuoco* 「火のように赤い」。②色彩形容詞に *-issimo* が付加された絶対最上級が存在すること。たとえば、*idre verdissime* 「濃い緑色のヒュドラ大蛇」【*Inf. IX, 40*】、*una tovaglia bianchissima* 「真っ白な食卓布」【*Novellino, 23*】。③風の色語が数

種存在すること。たとえば、color bora「ボーラ（＝アドリア海北部の冬の激しい北東風）色」、color brezza「微風・涼風色」、color libeccio「リベッチョ（＝温かい南西の強風）色」、color mistral「ミストラル（＝フランス南部の冷たい北西風）色」、color monzone「モンスーン（＝季節風）色」、color scirocco「シロッコ（＝北アフリカから吹く熱風）色」、color tramontana「北風色」、などが挙げられる。

イタリア語における面白い色彩語・色彩表現として、①形容詞：*bianche parole*「白い（＝虚偽の）言葉」【Tesoretto,2770】、*il film giallo*「黄色い映画（＝ミステリー映画）」、*ridere verde*「緑の状態で笑う（＝心にもなく笑う、苦笑する）」、*sciopero bianco*「白いストライキ（＝順法闘争）」、②名詞：*color cammeo*「カメオ色」、*color siesta*「午睡色」、*il rosso dell'uovo*「卵の赤（＝卵の黄身）」、などが挙げられる。

イタリア語と日本語の色彩語を比較対照してみると、形態的な対応が見られる用例が多数存在する。たとえば、「color acqua＝水色」（この種のタイプ 63 種）、「color bianco latte＝乳白色」（この種のタイプ 11 種）。

IV. フリウリ語に関する山本真司の報告内容

山本は、参考資料として、フリウリ語辞典 *Vocabolario della lingua friulana* からの抜粋（「色」*colôr* の項に掲載されている諸表現）を配布した。また、もうひとつのフリウリ語辞典 *Nuovo Pirona* に基づき、その特徴である詳細な相互参照を利用して、「青白い」とその類縁の形容詞のリストを作成して提示した。

このリストは、「青白い」に関連したさまざまな単語が、それらの意味の境界も定め難いままに、複雑に関連し合っている様子を示している。そこには、そもそも「色彩表現とは何なのか」という定義の難しさを垣間見ることができよう。一般論としても、色彩表現の延長・転用と見えるさまざまな表現のうち、どこまでを色彩表現に含めるべきかは、実は簡単には決め難いではなからうか。

ちなみに、イタリア語で通例は「顔色などが青白い」という意味の形容詞 *pallido* が、*Non ho la più pallida idea*。「私には全然わからない」— 字義的には「私は最も青白い考えさえも持っていない」— という慣用表現にも用いられる。これなども、「顔色などが *pallido* である」という場合の *pallido* の意味と「*pallido*（厳密に言えば女性形の *pallida*）な考え」という場合の *pallido* の意味のうち、どちらか一方が他方からの転用であると果たして本当に言えるのか、あるいは、より根源的な別の概念に両者を還元するべきなのか、など、検討してみる必要があるようである。

なお、山本は『『黒を一杯』—フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州における体験より—』と題して口頭発表も行なった。その詳細は本誌掲載の論文を参照されたい。

V. フランス語に関する鳥居正文の報告内容

フランス語では虹の色は次の七色：*violet*「紫」、*indigo*「藍」、*bleu*「青」、*vert*「緑」、*jaune*「黄」、

orangé「橙」、rouge「赤」。

虹の七色の語源：七色中、ラテン語起源のものは *vert*, *jaune*, *rouge* の三色のみ。 *bleu* は *blanc* 「白」、*brun* 「褐色」、*gris* 「灰色」などと同様、ゲルマン語起源。 *indigo* はポルトガル語（もしくはスペイン語）からの借用語。残りの *violet* と *orangé* はフランス語での語形成によって作られた語。前者は *violette* 「堇」からの逆成。後者は *orange* 「オレンジ」に接尾辞 *-é*（「…の性質を持った（もの）」を表す）が付いてできた派生語。

フランス語の色彩名の形態論・統語論：植物、鉱物など物の名前からの転用であることがいまだに強く感じられる色彩名（*marron* 「栗色」、*opale* 「オパール色」、*orange* 「オレンジ色」、*safran* 「サフラン色」など）は形容詞として用いられても不変化：*des yeux marron* 「栗色の目」、*des robes safran* 「サフラン色のドレス」。同様に、色彩の様々なニュアンスを表すために数多くの複合形が作られているが、これらも不変化：*la peinture vert mousse* 「モスグリーンのパンキ」、*des rideaux bleu foncé* 「濃紺のカーテン」など。

色彩とイメージ：フランス人は「ほろ酔いかげん」になると *gris* 「灰色」になり、「へべれけ」になると *noir* 「黒」になるなど、同じ事象でも言語・文化によりその色彩イメージが異なることがある。また *couleur de soleil* 「太陽色（＝黄色）」（日本人の場合、一般に太陽は赤のイメージ）、*couleur de lune* 「月色（＝白、銀白色）」（同様に、黄色のイメージ）など自然現象に基づく場合も同様のことが起こりうる。

色彩のレトリック：各言語で比較表現（直喩）として凝結した *être rouge comme un coquelicot* 「ひなげしのように赤い→（恥ずかしさなどで）真っ赤だ」のような表現から、その言語における色彩の典型例と、場合によっては色彩イメージを知ることができる。

VI. スペイン語に関する寺崎英樹の報告内容

寺崎は「形態論的に見たスペイン語の色彩表現」と題して口頭発表を行った。その詳細は本誌掲載の論文を参照。

VII. スペイン語に関する布施温の報告内容

虹の色は赤橙黄緑青藍紫の7色とされているが、これは世界共通の認識ではなく、各言語、各地域によって異なり、言語記号の恣意性を説明するための好例となる。では7という数字はどこから来たのだろうか。渡辺正雄著『科学者とキリスト教』にニュートンが太陽光線をプリズムで7つの区分帯に分けた図が載っていたが、その数字を見て、音階の振動数と逆比例していることに気づき、ニュートンが意図的に行ったとの確信を持った。意図的だと認識したのは、その当時イギリスでは虹の色は藍を除く6色であるとされていたのに、わざわざスペイン語由来の *indigo*（スペイン語では *índico*、これは *el Océano Índico*（インド洋）にしか使われない。スペイン語では *añil*（*aniline* 「紫色の顔料」を用いる）を持ち出して7色にしたことにもよる。この *indigo* は色の名前として

は 17 世紀以降に使われ出し彼の時代と符合する。ではなぜ 7 にこだわったのだろうか。それは 7 が神聖な数としてヘブライからキリスト教に引き継がれたからであり、またピタゴラス学派から続く音階との数学的調和に美を見いだしたからでもある。中世の大学での 4 科(*quadrivium*)は算術、音楽、幾何、天文学で音楽は基本的な教養科目であったし、またアラビアでも全ての哲学者は同時に音楽学者でもあったのである。

以上の推論を数年後に著者に確認したところ、事実であることが判明した。素人の私でも気づいたことに、専門家は勿論知っていたが、1988 年にイギリスの科学史家 Penelope Gouk 氏がニュートンの手稿に当たり最終的な証明を行った。私は彼より 1 年前に「発見」したが、単なる「気づき」なので 1 番手を主張するつもりはさらさらしないし出来もしない。

VIII. ポルトガル語に関する黒澤直俊の報告内容

黒澤は、ポルトガル語の色彩表現について①基本色と色彩用語、②色彩用語の語源、③熟語的表現、④ことわざ、格言の順に簡単な報告を行った。①については、ポルトガル語の基本色は *vermelho/encarnado* 「赤」、*amarelo* 「黄色」、*cor-de-rosa* 「ピンク」、*verde* 「緑」、*preto* 「黒」、*roxo* 「紫」、*azul* 「青」、*branco* 「白」、*cinzento* 「灰色」、*cor de laranja* 「オレンジ」、*castanho* 「茶」、*violeta* 「すみれ色」の 12 色とされ、ブラジルのポルトガル語では、茶色は *marrom*、灰色は *cinza* を用いる。しかし、ポルトガルでの *vermelho* 「赤」と *encarnado* 「肉色がかつた赤」の区別など怪しいものがあるし、*violeta* と *roxo* の区別もかなり人為的なものである可能性がある。ポルトガルとブラジルを比べると、ブラジルのポルトガル語のほうが歴史的に古い段階の状態を保持しているようである。他のロマンス語の黒に対応する *negro* は現代語では人種についてのみ用いられている。他に、色調の表現には *claro* 「明るい」*escuro* 「暗い」を色彩語に付けて表現したり、過去分詞から派生した形容詞などが用いられることが述べられた。②の語源については、大部分はラテン語から派生したもののだが、ゲルマン系の *branco* 「白」やアラブ系の *azul* 「青」がある。③と④では、手元の辞書やことわざ集などから色彩用語を含む表現を調べてみると、*sonhos cor-de-rosa* 「よい夢く(ピンクの夢)」や *ver tudo cor-de-rosa* 「楽観的だく(すべてをばら色に見る)」、*tudo azul* 「うまくいっているく(すべて青)」などピンクや青は明らかにプラスのイメージであるのに対し、黄色や緑にはマイナスと取れる表現がある。他の色彩語はプラスともマイナスとも取れるものが混じっている。最後に、頻度数との相関を見ると、*vermelho* 「赤」、*amarelo* 「黄色」、*verde* 「緑」、*preto* 「黒」、*azul* 「青」、*branco* 「白」が特に高い順位を占める語であることがわかる。

§3 質疑応答

司会：「統一テーマ」の枠内(持時間 20 分)での寺崎・布施・山本の 3 先生のご発表に対する質疑応答から始めたいと思います。

後藤齊氏：布施先生のご発表は個人的にはおもしろくお伺いしました。ただちょっと気になりましたのは、ニュートンは周波数の高い紫から始めて周波数の低い赤への順で並べていますが、音楽のほうは逆ですよ。ここは周波数の低いほうから高いほうへと、赤を 1/2 ではなくて 1 にして比率を計算しなおすと音楽の比率と一致するように思います。並べなおしたほうが良いような気がします。

布施：普通の順序で計算しなおしてみましたが、でたらめな数字が並んで、比例にはなりません。なぜニュートンがこのように並べたのか、なぜ紫を外側に置いて赤を一番内側の大体 1/2 にしたのか、私は分かりません。しかし、こういう分割の順序でやってみますと、振動数と音階の差が反比例するという昔からの伝統があるのかなと思います。

後藤氏：手で計算するとかなり一致します。

布施：一致するといっても、1 に近い数字になりますか？

後藤氏：はい。赤を 1 にして、紫を 2 になるように計算すると音階の周波数と一致するようです。

布施：私はそこは計算しませんでした。ただ、このような順序にニュートンが並べていたものですから…。確かめてみます²⁾。ハンドアウトの「補足」のところに書きましたが、音階の周波数は簡単に計算できますので、皆さんもやってみてください。

木村琢也氏：布施先生のご発表に関して私も後藤先生のご意見と似たことを考えていました。まず、紫が 1 で赤が 1/2 というのは周波数の比ですよ。波長の比ではありませんよね。ですから、紫は赤の 2 倍の周波数ですよ。ですから、後藤先生がおっしゃったように、赤を左に置いて 1、紫を右に置いて 2 として計算しますと、赤の次の橙は確かに 9/8 になりレと同じなのですが、ミは半音下がります。ですから、長音階とは違う普通の西洋音楽には存在しない音階になるはずですよ。

司会：ほかのご質問がありましたらお願いいたします。

菅田茂昭氏：山本先生のご発表にありました「赤ワイン」のことを「黒」という現象ですが、フリウリにその発想の起源があるかと思います。私もよく出向いているサルジニア島でも「赤ワイン」のことを「黒ワイン」と言います。現地のレストランではそのような言い方をしたほうが喜んでくれます。もしほかのロマンス語や方言でもこの種の現象がありましたら教えてください。

小林：カタロニア語にも同じ現象があります。

荻原寛氏：「黄色い」はスペイン語では amarillo、ポルトガル語では amarelo です。これらの -illo や -elo は縮小辞ですよ。そうしますと語幹は amaro ということになります。この amaro はイタリア語では「苦い」という意味ですが、「黄色い」は何か味覚と関係があるのでしょうか？

小林：amarillo ですが、これはスペイン語語源学の大家 Corominas がラテン語の amarus 「苦い」の中世的派生語 amarellus 「顔色の悪い」に由来していると言っています。

司会：ここからは「パネリストの報告内容」(持時間 10 分)でのパネリストの発表に対する質疑応答に移りたいと思います。

佐野直子氏：鳥居先生の「フランス語における色彩表現」に出てきた *orangé* 「橙色の」は過去分詞形だと思います。ポルトガル語にも過去分詞形による色彩表現があり、その場合は「～がかった」という意味になります。このような過去分詞が形容詞化した色彩表現はオクシタン語にもありますが、そのほかのロマンス語にもあれば教えてください。また、過去分詞に由来しない *orange* 「橙色の」と *orangé* 「橙色の」との使い分けはどうなっていますでしょうか？

鳥居：*orangé* は虹と光学の場合に用いられるようです。

黒澤：佐野先生がご指摘のように、ポルトガル語の「～がかった」という意味の形容詞には、「～色にする」という動詞(たとえば *avermelhar* 「赤くする」)の過去分詞に由来する場合(たとえば *avermelhado* 「赤みがかった」)もあります。*encarnado* 「赤」も過去分詞形に由来しています。それから、荻原先生がご指摘の *amarelo* 「黄色」と味覚との関係ですが、ポルトガル語で「にがい」という意味の形容詞は、ラテン語 *amarus* からの直接の派生語ではない *amargo* です。

寺崎：佐野先生のご質問のお答えとして、スペイン語もごく限られた語彙ではありますが用例が見られます。たとえば名詞 *naranja* 「橙色」に対する *anaranjado* 「橙色の」という形容詞がそれです。但し、この場合、接尾辞 *-ado* とともに接頭辞 *a-* も付加されている複接派生語(*parasynthetic word*)です。

今田良信氏：黒澤先生と古浦先生と鳥居先生にお伺いします。「苦笑いをする」とか「無理に笑う」とか「心にもなく笑う」とかいう表現はまったく同じかどうか分かりませんが、一応「無理やり笑う」ということで同じ意味であるとして、イタリア語では *ridere verde* 「緑色の状態で笑う」、ポルトガル語では *sorrir amarelo* 「黄色の状態で笑う」とハンドアウトにあります。フランス語でも *rire jaune* 「黄色の状態で笑う」で表現されます。この表現の出自についてご教示いただきたいのですが。

古浦：*ridere verde* の出自は、イタリアで出ている国語辞典、伊々辞典だったと思います。

黒澤：私が引用したのはブラジルで出ている収録数の多いポルトガル語辞典とポルトガルで出ている中辞典クラスの辞書です。

今田氏：「出自」という言い方が曖昧だったのですが、なぜ「苦笑い」がこういった色で表わされたのかという質問なのですが。

黒澤：それは調べていません。

鳥居：「苦笑い」と直結するかどうか分かりませんが、フランス語の *jaune* には *bec-jaune* (あるいは *béjaune*) 「(くちばしの黄色い) 若鳥；《古》青二才」に見られるように、「うぶな」とか「未熟な」といった意味があります。「悪賢さ」という良くないイメージもフランス文化の中に根付いているように思います。

古浦：「なぜか?」というご質問はそもそもむづかしいです。うまく答えられなくてもご勘弁ください。

イタリア語で「緑」は *semaforo verde* 「緑信号＝青信号」のように良い意味が多いのですが、*essere al verde* 「緑の状態に在る＝一文無しである」という悪い意味の熟語もあります。また、*frutta verde* 「緑の果物＝熟していない果物」のように「未熟な」というマイナス・イメージもあります。イメージがプラスなのかマイナスなのかという切り口は非常におもしろいところです。

荻原氏：スペイン語の *verde* 「緑」は *un viejo verde* 「好色な老人、狒狒おやじ」のように、「わいせつな、卑猥な」という意味でよく使われます。フランス語やイタリア語にもこのような用法はあるのでしょうか？

布施：アンリ四世のあだ名が *le vert galant* 「緑の色事師」だったように、フランス語の *vert* には「年甲斐もなく若い」という意味がありますので、スペイン語と共通しているのかもしれませんが。

鳥居：フランス語にも *en dire de vertes* 「みだらなことを言う」という表現があります。

富盛伸夫氏：「緑色の言葉」はフランス語でも生々しい表現、荒々しい言葉、前後の文脈によっては卑猥な意味になりますね。「緑色言葉の辞典」なるものも刊行されています。それから、小林先生のご発表の中で、基本的な色彩語としての「白・赤」の中にレト・ロマンス語系のもが入っていませんでしたので、補足いたします。「白」についてはレト・ロマンス語系の言語にはラテン語 *albus* 直系の *alv* (エンガディン地方ロマンシュ語) も存在しますので加えてください。また、「赤」もラテン語 *coccinus* に由来する *cotschen* (同上) という語形があります。この形容詞は「赤毛の犬」・「赤ワイン」・「空が赤い」など幅広く使用されています。それから、過去分詞に由来する色彩語に関して申しますと、もともと基本色であったものに関しては、*ir* 型の動詞 (ものによっては *ar*, *er* 型の動詞) に過去分詞語尾が付き、語頭にも *en-* や *in-* が付加されて、「～色がかかった」という意味の形容詞となります。また、「～色っぽい」という表現にはラテン語の *-ente* に由来する *-aint* という生産的な接尾辞があります。

布施：「顔が赤くなる」という表現はそれぞれのロマンス語で何と言いますか？スペイン語では *ponerse colorado* 「色の付いた状態になる」と言います。また、「赤ワイン」のことを *vino tinto* 「染まったワイン」と言います。ですから、「色の付いた」は「赤い色が付いた」ということになります。それから、ロシア語の「赤い」には「美しい」という意味もあって、「赤の広場」は「美しい広場」でもあるようです。これらを勘案しますと、「赤」は代表的な色であるように思われます。それから、カルメンが登場するときに銜えていたのは赤いバラではなくて、ミモザの黄色い花でした。ミモザの花は惚れ薬・媚薬なのだそうです。ご参考まで。

古浦：腹を立てて怒って顔が赤くなる場合、イタリア語では「赤」を使います。

小林：恥ずかしくなって顔を赤らめる場合、ラテン語では「赤」を使います。

鳥居：フランス語では恥ずかしいときも怒ったときも「赤」を使うようです。*rougir* は「赤くなる、恥ずかしい」ですし、また、「赤が顔に登った」が怒ったときと恥ずかしいときの両方の表現にな

ります。さらに、「顔が紫色になる」も怒ったときと恥ずかしいときの両方で使われます。

司会：「これこれという表現はそれぞれのロマンス語で何と言いますか？」というご質問も実はむつかしいので、本日はネイティブ話者の方が居られれば良いのだがと思って来たのですが、残念ながら、いらっしやいませんですね。

布施：私の質問の意図は「色のついた、染まったというだけで赤が表わされるか？」という意味だったのですが、日本語でも「色をなす」という表現がありますね。

後藤氏：小林先生のご指摘で「赤」が印欧語の時代から安定した語形であるということと、「美しい」という意味を持つ言語もあるということで、「赤」は代表的な色であると思います。それは多分人間の色の知覚と関係していると思います。物理的な周波数の長短とは別に、赤・緑・青のそれぞれに反応する3種類の錐体という色覚をつかさどる細胞があります。色はこれらの錐体のうちのどれがどのような割合で刺激されるかによって識別されるのですが、これらはきれいに分かれているわけではなく重なっていますので、中間的な色はどうしてもブレることになります。「赤」は短くて端に位置していますので、「赤」は「赤」だけしか刺激されないのですね。そういうことがあるので、「赤」は代表的な色であり、語形も安定しているのではないのでしょうか。

小林：色彩名について考えるとき、私たち現代人の感覚と古代人の感覚とは全く別であろうと思います。「赤」を知覚するとき、その「赤」がどこにあったかということが問題なのです。私たち現代人はクレヨンなどで分類された色を教育されています。しかし、古代人は自然界の具体物の中から色彩を識別しなければなりません。「漆黒」は存在したと思いますが、「純白」はどこにあったのでしょうか。また、具体的な「赤」もどこにあったのでしょうか。「赤」は確かに強い色ではありますが、このように考えて行きますと、その強さの根拠は分からなくなります。

古浦：質問ではないのですが、ブラジル・ポルトガル語の *roxo* 「紫」には「情熱的な」という意味があります。そもそも「紫」は激しい色ではないと思うのですが、珍しい現象ですね。

小林：*roxo* 「紫」の語源はラテン語の *russeus* 「赤」です。これがなぜ「紫」になったのかは分かりませんが、「情熱的な」という意味はそこあたりに原因があるのかもしれませんが。

鳥居：さきほど小林先生は「白はどこにあるのでしょうか？」とおっしゃいましたが、フランス語の「白」には「何も無い」というイメージがあります。たとえば *mariage blanc* 「白い結婚」は「性交渉のない結婚」という意味です。

古浦：イタリア語にも *matrimonio bianco* 「白い結婚」という表現がありまして、意味はフランス語の場合と同様です。また、*sciopero bianco* 「白いストライキ＝順法闘争」の場合も、「白」には「効き目が薄い」というマイナス・イメージがあります。同じ色でもプラス・イメージとマイナス・イメージのどちらか一方ではなくて、どちらも含まれている場合もありますし、それぞれのロマンス語でそれぞれだろうと思います。そういう意味でロマンス諸語間の比較対照はおもしろいテーマだ

と思います。

山本：「白」には「白い色が存在する場合」と「何も無いとして捉えられる場合」の二通りの系統があるように思います。それともう一つ、古浦先生にお聞きしたいのですが、イタリア語で「青白い考え」という表現がありますよね。たとえば *Non ne ho la più pallida idea*。「私はそのことに関しては最も青白い考えすら持っていない」は「私はそのことはさっぱり知りません」という意味です。この *pallido* を英語の *faint* 「微かな、ぼんやりした」で訳して、簡単に片付けている辞書もあります。しかし、「内容の無さ」という点では「白」と結びついているのかなと思うのです。この *pallido* と色との関係はどうなのでしょう。

古浦：*pallido* は「青ざめた、血が引いて顔色が蒼白の」という意味で、「白」のような色彩語ではないと思いますが、よく分かりません。

司会：短い時間でしたがいろいろな局面が論じられて有意義だったと思います。皆様、どうもご協力ありがとうございました。

§4 まとめ

本大会では「虹の色と音階との間の興味深い関係」・「色彩語の語源」・「色の認識と定義のむつかしさ」など、幅広いテーマが論じられた。最後に、個々のロマンス語における具体的な色彩表現の特色に関して、今回明らかになった主な事実を箇条書きにしてまとめておきたい。

- I. 形態論的に興味深い事実として、過去分詞に由来する色彩語が存在すること。たとえば、ポルトガル語 *encarnado* 「赤」、フランス語 *orangé* 「橙色」。
- II. 統語論的に興味深い事実として、①スペイン語では、「名詞＋色彩形容詞（＋品質形容詞）」という構造において修飾語と被修飾語との間の呼応にさまざまなバラエティーが見られること。②色彩形容詞を名詞が修飾できること。たとえば、スペイン語 *azul cielo* 「空の青」、イタリア語 *nero carbone* 「石炭の黒」、フランス語 *vert mousse* 「モスグリーン」など。
- III. 意味論的に興味深い事実として、①同じ意味内容の表現でありながら、言語によって別の色彩語が用いられる場合があること。たとえば、「苦笑いする」はイタリア語では「緑色の状態で笑う」、ポルトガル語・フランス語では「黄色い状態で笑う」と表現されていること。これは、イタリア語の「緑色」にもポルトガル語・フランス語の「黄色」にもそれぞれ「未熟な」というマイナス・イメージが存在するので、「苦笑い」は「満面の笑み」と比べると「未熟な笑み」ということであろうか。②語源としてのラテン語の色彩（或は、元の色彩）がロマンス語に入ってから別の色彩に変化している場合があること。たとえば、ラテン語 *albus* 「白」に指小辞の付いた派生語がルーマニア語では *albastru* 「青」へと、ラテン語 *russeus* 「赤」がポルトガル語では *roxo* 「紫」へと、ラテン語 *russus* 「赤」がオック語では *ros* 「黄」へと、さらに、イタリア語で言う *vino rosso* 「赤ワイン

ン」がフリウリ語では *vin neri* 「黒ワイン」へと、それぞれ変化していること。

IV. 語彙論的に興味深い事実として、①フランス語の色彩名がほかのロマンス語に多く借用されていること。たとえば、フランス語 *marron* 「栗色」はスペイン語では *marrón* として、ポルトガル語では *marrom* としてそれぞれ借用されている。また、フランス語 *bleu* 「青」はイタリア語では *blu* として、ルーマニア語では *bleu* としてそれぞれ借用されている。この借用現象はルーマニア語において著しい。②イタリア語には風を表わす色彩語が存在すること。たとえば、*color tramontana* 「北風色」など。③お国柄を表わす特徴的な色彩語が存在すること。たとえば、イタリア語の *color siesta* 「午睡色」、フランス語の *café-au-lait* 「ミルクコーヒー色の」など。

以上の諸事実を勘案すると、ロマンス諸語はさまざまな局面において実にさまざまなバラエティーを呈していることが分かる。ロマンス諸語間の比較対照研究の重要性を痛感する。

注

- 1) 本稿では「§1・§2・§3のⅢ・§4」は古浦が、「§3のⅠ」は小林が、「§3のⅡ」は倍賞が、「§3のⅣ」は山本が、「§3のⅤ」は鳥居が、「§3のⅥ」は寺崎が、「§3のⅦ・注2)」は布施が、「§3のⅧ」は黒澤が、それぞれ担当・執筆した。
- 2) 太陽光線の分割と音階の振動数は逆比例するとの布施の見解に関して、正比例ではないかとのご意見がありました。事実計算してみるとそれでも良さそうな数字が出てきます。しかし2カ所（ミとファ、シとド）で合いませんし、音の高さは弦の長さで反比例するので、発表のままにしたいと思います。なおニュートンの分割通りにヴァイオリンで試してみましたが、D線（レの開放弦）でハ長調を弾くときに極めて近いのですがミとファが少し空きすぎで完全には一致しませんでした。反比例を採る根拠にはなりました。